
レイカ & タツオのクルシミマスぶっ潰し大作戦！

栗山ぶにねこ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

レイカ&タツオのクルシミマスぶっ潰し大作戦！

【Nコード】

N3118C

【作者名】

栗山ぷにねこ

【あらすじ】

悪魔のアンドレ・マリーヌ・レイカは「人間たちはクルシミマス（クリスマス）とやらで盛り上がってるのにあたし達は何もい事が無い！」と言って人間界に行き、街をめちゃくちゃにする。そこに「小説戦隊イキボトケンジャー」が現れ、レイカと戦う事になる。

レイカ&タツオのクルシミマスぶっ潰し大作戦！

「人間達はクリスマスとやらで盛り上がってるみたいだな。」

タツオは雑誌のクリスマス特集を見ながら言った。

メラメラと燃え上がるレイカ。

「ん？どうした？」

ダンツと机を叩くレイカ。

「おかしいわっ！」

レイカはそう言って立ち上がった。

「何が？」

「人間達はクルシミマスとやらで盛り上がってるのにあたし達には何もいい事が無いっ！おかしいっ！おかしすぎるわっ！」

「レイカ落ち着け、パラトール様はきつと復活する！そしてクルシミマスじゃなくてクリスマスだっ！」

「やかましいっ！ああ人間達が憎いっ！何がクルシミマスよっ！何がサタンクロスよっ！何がトカナイよっ！ああ憎憎しいっ！さあタツオ、人間界に行ってクルシミマスをぶっ潰すわよっ！」

注：サタンクロスではなくサンタクロス、トカナイではなく

トナカイです。

「え？」

「え？じゃないっ！人間達だけがいい思いするなんて不公平だわ、不幸になるがいいっ！」

レイカはそう言って人間界にワープした。

「ちよつと待てレイカツ！」

タツオはそう言って人間界にワープした。

「12月24日クリスマスイブ、聖なる夜は彼と2人ですごすの。」

神崎美香はデパートまでの道を歩きながら言った。

「シャンパン、ケーキ、ローストビーフ、素敵なダーリンと2人で過ごす華麗なる一夜・・・」

「しかし実際はイキボトケンジャーのメンバーとクリスマスパーティーをするのであった。」

妄想する美香の横で三通知恵美は言った。

2人は今、この後行われる「小説戦隊イキボトケンジャー」のクリスマスパーティーの為のケーキを買いに行く途中なのである。

「がつくり。」

「何ががっくりよ。これからパーティーなんだからパーツと盛り上がりましょうよ。」

「結婚してる人はいいわね。」

「そつでもないわよ。」

知恵美には3人の子供と夫がいる。

ちなみに子供たちはそれぞれ友達とクリスマスパーティー、夫は仕事である。

「つていうか昨日までは派手にイルミネーションしてたのに何で今日は静かなのかしら？」

「さあ。」

確かに今美香達が歩いている道は、全くイルミネーションがされていない。

やがてデパートに着いた。

中に入る2人。

だが、中でもクリスマスのイルミネーションはなされておらず、店内にはとてつもなく怪しげな音楽が流れている。

モミの木が置かれているが、なぜか葉が全て散っており、かつてモミの木を彩っていたであろう飾りつけが木の下に散乱して悲しい

状態になっている。

「これは・・・何？」

「・・・さあ。」

奇妙な光景を不気味に思い、顔をこわばらせて変な汗を掻く2人。

2人は不気味に思いつつ地下のケーキ売り場に向かった。

やがてケーキ売り場に着き、2人は驚きの光景を目にした。

なんと、どの店のケーキも見事に腐敗しているのである。

しかも接客をしているのはガイコツ。

傍らに置かれている人形もサンタクロースの格好をしたガイコツ人形になっている。

震え上がる2人。

2人はすぐさまデパートを後にした。

「え？それは本当なの？」

斉藤優子は「小説戦隊イキボトケンジャー」のアジトでお茶を飲みながら言った。

クリスマスの飾りつけはすでに終わっており、後は料理を置くだ

けになっている。

「そうなのよ、もうものすくびっくりして。」

「身も凍るような体験だったわね。」

「それが本当だとしたら悪魔の仕業かしら？」

長田江理花は自分と美香と知恵美の3人分のお茶を運んできて言った。

「かもしれないわね。」

「おーっほっほっほほほほほ！よく分かったわね。」

「この高笑いは」

優子達の前にレイカが現れた。

「やっぱり。」

「あんたの仕業なのね。」

「そうよ。あたし達は何も楽しいことは無いのにあんた達だけが楽しむなんて、許さないっ！だからクルシミマスとやらをぶち壊してやるのよ。」

「クルシミマス？」

優子達の目がハテナになった。

レイカ&タツオのクルシミマスぶっ潰し大作戦！

「レイカ、あんた古いオヤジギャグ知ってるのね。」

「私の居酒屋に来るおやじ達もよく言ってるわね。」

時雨美佐子が現れて言った。

「あつ、レイカ！またなんか企んでんの？」

「そうよ。クルシミマスをぶっ潰すの。」

「クリスマスね。それはともかく、クルシミ・・・じゃなかったクリスマスをぶっ潰すなんて許さないわ！」

「そうよそうよ！」

「レイカ、ここにいたのか。」

タツオが現れて言った。

「タツオ。」

「本当にクリスマスをぶっ潰しに来たんだな。」

「そうよ。さあタツオ、これからサタンクロースの所に行ってプレゼントを奪ってきなさい。世界中のガキンチョどもが悲しむわ。」

「サタンクロース？」

またしてもはてなになる優子達の間。

目がハートになるタツオ。

「さあ今すぐサタンクロスからプレゼントを奪ってくるの！」

「はいっ！」

タツオはそう言って猛スピードで去っていった。

「タツオっていつからシヨタからおやし萌えになったのよ？」

「初回限定ナントカ版長すぎね。」

「充実のラインナップって……。」

優子達は冷や汗を掻きながら口々に言った。

「聞こえてたのね。」

「丸聞こえよ。それはともかく、クリスマスをぶっ潰すなんて許さないわよっ！」

「ほほほほ、いつまでもそう言うておくことね。じゃあ。」

レイカは消えた。

「何の騒ぎ？」

「なんかタツオが猛スピードで去って行ったけど？」

高山圭子と小山理江が現れて言った。

「レイカとタツオがクリスマスをぶっ潰そうとしてるのよ！」

「何ですって?!」

「ふう。2年ぶりに来たわね、日本。」

クリデ・スマサンはトナカイが引くソリに乗りながら言った。

クリデはサンタ王国から派遣されたサンタで、今年は2年ぶりに日本担当になった。

サンタクロースといえば大抵白いひげを生やしたおじいさんらしい浮かべるが、クリデは若いのでヒゲが生えておらず、しかもオカマである。

「トスディサちゃん達は元気かしら?」

「はははははははは!」

背後からタツオが高笑いと共に現れた。

ちなみにタツオには羽が生えているので空が飛べるのである。

「何よあんだ。」

「俺はピンク・コンプレックス・タツオだ。さあプレゼントをもらおうか。」

「ダメよ！これは日本中の子供達に配らなきゃいけないのよ！」

「そのプレゼントをくれたら俺は今人間界で話題になってる本「楽しく愉快なおやし萌え」死ぬ時はもちろん萌え死によっ 私の死因はも・え・じ・に」のスペシャル萌え萌えDVD2枚組み&プレミア写真集&萌えおやしポスター付き初回限定超ウルトラスーパーミラクルハイパーDXマスター萌え死にああ生きているって素晴らしい！神様ありがとう！！版をもらえるんだぞっ！」

「そんな事知らないわよっ！大体その楽しいナンタラってというのはホントに話題になってんの？」

「なってるさ。さあプレゼントをもらおうか。」

「ダメよっ！」

「いいから渡せっ！」

タツオはクリデの後ろに置かれている大きな白い袋を奪おうとした。

「あっ、ちょっと何やってんのよっ！」

クリデは後ろを向いて言った。

「ピンクファイヤー！」

タツオは手からピンク色の炎を放った。

よけるクリデ。

「はははは、プレゼントはもらっていくぞ。」

タツオは袋を奪ってそう言い、去っていった。

「あつ、ちょっと待ちなさい！」

クリデはそう言い、方向転換してタツオを追った。

指を鳴らすタツオ。

その瞬間、ソリがトナカイごとまっさかさまになり、クリデはソリごと落ちていった。

「きゃー！」

「ウォー！」

「はははははははは！」

タツオは去っていった。

「今日はクリスマスイブねえ。」

「そうねえ。」

「聖なる夜だわ。」

愛山好男達は「男色戦隊オカマーズ」のアジトでコーヒーを飲み

ながら言った。

「高男ちゃんは？」

「クリスマスパーティーですって。清雄さんの甥っ子の竜太郎くんを射止めるんだとか。」

「あの子へテロでしょ？」

「そうねえ。」

「ああつ、クリスマスイブは清雄ちゃんと過ごしたかったのに仕事だつて言われちゃったわあ。」

乙女権太郎おとめけんたろうは涙ながらに言った。

「私もぺいりんと過ごしたいわね。」

嬢倉長流は言った。

今日の長流はすごい。

いつもより一層フリフリフィルのロリータ服（クリスマスバージョン）にクリスマスバージョンのヘッドドレスという格好である。

ちなみに好男と権太郎は至って普通の格好である。

「今日の長流さん、いつもより・・・」

その時、「きゃー！」という声と共に天井をぶち破ってサンタの格好の男が落ちてきた。

同時に外にトナカイとソリが落ちた。

驚く3人。

「イタタタタ。」

起き上がるサンタ男。

「あんだ・・・誰？」

「今年の日本担当サンタ、クリデ・スマサンよ。」

「今年の日本担当サンタ？」

目がハテナになる好男達。

「サンタになりきってるうちに頭狂っちゃった人かしら？」

「違うわよっ！」

「いや、本物よ。外にトナカイがいてソリがあるし。」

長流は窓の外を指差して言った。

「最近のサンタさんって煙突からじゃなくて天井をぶち破って来るわけ？」

「それも違うわ。」

冷や汗を掻きながら言うクリデ。

「で、明らかに子供じゃないあたし達に何かご用？」

「いや、別に用は・・・そうだわあなた達、タツオって言う男知らないかしら？」

「タツオってピンク・コンプレックス・タツオ？」

「そうよ。そいつにプレゼント奪われてソリごとひっくり返されちゃったのよ。」

「何ですって?!それは許さないわねっ!」

「そうねっ!」

「で、何か楽しいナントカのカントカ版がどうのこつものって言うたわ。」

好男達の目の色が変わった。

「それって今話題の「楽しく愉快なおやし萌え〜死ぬ時はもちろん萌え死によっ 私の死因はも・え・じ・に〜」じゃないかしら?!」

目を輝かせて言う好男。

「そ、そんな感じだったわね。」

冷や汗を掻きながら言うクリデ。

「カントカ版つて初回限定の超ウルトラスーパーミラクルハイパーDXマスター萌え死にああ生きているって素晴らしい！神様ありがとう！！版よね？！」

目を輝かせて言う権太郎。

「そ、そうよ。」

冷や汗を掻きながら言うクリデ。

「スペシャル萌え萌えDVD2枚組み&プレミア写真集&萌えおやじポスターがもれなく付いて来るのよねっ？！」

「そ、そう言えばそうだったわね。」

冷や汗を掻きながら言うクリデ。

「許さないわっ！タツオが悪魔の分際で「楽しく愉快なおやじ萌え」死ぬ時はもちろん萌え死によっ 私の死因はも・え・じ・に」
「スペシャル萌え萌えDVD2枚組み&プレミア写真集&萌えおやじポスター付き初回限定超ウルトラスーパーミラクルハイパーDXマスター萌え死にああ生きているって素晴らしい！神様ありがとう！版を手に入れるなんてっ！」

「お笑い芸人から俳優歌手、普通のサラリーマンや警官、ゲイビデオに出ているAV男優に至るまでさまざまなおやじをたっぷり掲載という充実のラインナップを収録した本は人間であるあたし達

「が手に入れるべきよっ！」

「さらに今なら発売記念イベント「あんな萌えおやじやこんな萌えおやじと夢のときめきるんらん萌え死に握手会」招待券つきなのよっ！タツオと萌えおやじが握手されてたまりますかっ！」

「楽しく愉快なおやじ萌え〜死ぬ時はもちろん萌え死によっ 私の死因はも・え・じ・に〜」スペシャル萌え萌えDVD2枚組み&プレミア写真集&萌えおやじポスター付き初回限定超ウルトラスーパーミラクルハイパーDXマスター萌え死にああ生きているって素晴らしい！神様ありがとう！！版はあたしたちの物よっ！」

3人は燃え上がりながら言った。

「よくそんな長ったらしいセリフを噛まずに言えるわね。」

クリデは冷や汗を掻きながら言った。

「って、好男ちゃんっ！あなた「2006年ベストヒット萌えおやじ写真集」持つてるでしょっ！」

「しかも初回限定スペシャルDVD&超萌え萌えソング入りCD付きバージョンでしょっ！」

「そんなの関係ないわっ！権太郎さん、2人で清雄さんの写真集を1冊ずつ初回限定バージョンで買いに行つて萌え、清雄さんに強引にサインを要求してききたんに「俺だつて清雄にサインして欲しいのになかなかしてくれへんねんぞっ！」って怒られた仲間でしょっ！」

「そうね。」

「どんな仲間なのよ。しかも写真集の初回限定版出すぎよ。」

「強引にサインを要求って……。」

冷や汗を掻きながら言うクリデと長流。

「長流さん、2人で「全日本ロリータコンテスト」で深田恭子やロリータ族。を打ち負かして優勝しようって言って気合を入れてロリータの格好をしたのに、女性限定でエントリー出来なくて心は女だっという事をアピールしまくっても無理でさらに強烈なアピールをしてたら警察を呼ばれて署まで連れて行かれて仲良くカツ丼を食べた仲間でしょ?!」

「そうね。」

「それって明らかにイケナイ仲間でしょ?」

「あんた達あたしがいないトコでそんな事やってたの?」

冷や汗を掻きながら言うクリデと権太郎。

「さあプレゼントを取り戻しに行くわよっ!」

「そうね!」

「楽しく愉快なおやし萌え」初回限定版はあたし達の物よっ!」

好男達はそう言って去っていった。

「何か目的違うけど、まあいっか。っていうか楽しいナンタラってそんな短くまとめられたのね。」

クリデもその場を後にした。

「確かにイルミネーションのカケラもないわね。」

「ケーキも全然美味しくなさそうだし。」

「モミの木散ってるし。」

「怪しげな曲が流れてるし。」

優子達は街を歩きながら言った。

「一刻も早くレイカを見つけて元に戻してもらわないとっ！」

「そうね。」

「おーほほほほほほ！」

「この笑い声は」

優子達は声のする方に向かった。

そこではレイカが魔法をかけて雪だるまを溶かし、サンタ人形をガイコツにし、イルミネーションの明かりを消し、怪しげな音楽をかけ、モミの木の葉を散らせ、ケーキを腐敗させていた。

レイカ&タツオのクルシミマスぶっ潰し大作戦！

「そこまでよっ！」

振り向くレイカ。

「あらあんだ達、来てたの。」

「クリスマスをぶっ潰すなんて許さないわっ！」

「ほほほほ、何が何でもあたしはクルシミマスをぶっ潰すわよっ！
！ルビデ・サンダー！」

レイカは手から電流を放った。

よけるイキボトケンジャー。

「優子クリスマスビーム！」

「江理花イヴサンダー！」

「圭子聖夜も一人っ！クリスマスのチラシタイフーン！」

「美佐子おやじの対応でクルシミマスアルコール！」

「理江リサーブアーミーイキボトケモミの木！」

「美香クリスマスの香りっ！」

「知恵美ホーリーナイトヨソジツ！」

クリスマススペシャルバージョンのビームや雷や「40」という文字や酒の波が来、モミの木の葉やクリスマスのチラシが舞い、クリスマス fragrancy が漂ったが、レイカは全てよけた。

「ほほほ、こんな事でへこたれるあたしじゃないわっ！」

「京子ダブルシマザキパワークリスマスバージョン！」

声と共に「島崎」という文字型の雪（モミの葉とサンタの帽子付き）が大量にレイカの元に降って来、レイカは雪とモミの葉とサンタの帽子に埋もれた。

そして空から江理花の姉、島崎京子が降りてきた。

「お、お姉ちゃん・・・」

冷や汗を掻いて言う江理花。

「さあこいつに街を元に戻してもらわよっ！」

「そうね。」

京子とイキボトケンジャーは雪とモミの葉とサンタの帽子の山からレイカを引っ張り出し、強制的に街を元に戻させた。

街には再びイルミネーションが灯り、雪だるまもサンタ人形もケキもモミの木も元に戻り、音楽はクリスマスソングになった。

「タツオの奴、許さないわっ！どこにいるのかしら？！」

突進するタツオ。

が、途中でポチツという音がし、その直後に上空から降ってきた網に捕らえられてしまった。

どうやらスイッチを押すと網が落ちてくるようになっており、タツオはそのスイッチを踏んでしまったらしい。

「大成功ね。」

「好男ちゃんいつの間に網なんかセットしたの？」

「しかもスイッチを押したら落ちてくるようになってるし。」

「用意周到ね。」

権太郎達は冷や汗を掻きながら言った。

こうしてイキボトケンジャーは京子を交えてクリスマスケーキを買いに行つてパーティーを開き、好男達はプレゼントを取り返して子供達に配つた。

「さあ、いよいよ最後の一個ね。」

「そうね。」

「でもこの箱何？」

「すごい大きさね。」

クリデ達はとてつもなく大きな箱を前にして言った。

「で、配達場所は・・・イキボトケンジャーのアジトね。早速持っていきましょう。」

「そうね。」

「でも何でイキボトケンジャーのアジト？」

「さあ。」

4人はそう言いながらソリに乗り、イキボトケンジャーのアジトまで飛んだ。

「メリークリスマス！」

イキボトケンジャーと京子は乾杯して言った。

「さあどんどん食べて。」

「京子さんお料理ありがとうございます。」

「いえいえ。」

その時、呼び鈴が鳴った。

「はい。」

玄関に行く優子。

やがてクリデや好男や権太郎や長流と共に大きな箱を持って戻ってきた。

「な、何それ?!」

「さあ。分かんないけどお届け物みたいよ。」

「お届け物?!」

5人は箱を地面に置いた。

「こ、これは・・・何?」

「さあ。」

好男がそう言った直後、箱がガタガタと動いた。

驚く一同。

やがてフタがパカッと開き、中から露出度の高い格好をした中山^{なかや}廣子^{ひろこ}が現れた。

「ひっ、廣子さんっ?!」

突然の廣子の登場に驚く一同。

「仕事じゃなかったんですか?」

「思ったより早く終わったのよ。さあこれから私のクリスマススペ

シャルネタを披露するわよっ！」

廣子は箱から出ながら言った。

「いや・・・結構です。」

冷や汗を掻くイキボトケンジャー！。

「見たいわっ！」

目を輝かせる京子。

「お、お姉ちゃん・・・」

さらに冷や汗を掻く江理花。

「OK。じゃあ京子さんの為に腕によりをかけて女を捨てるわっ！」

「廣子さん・・・」

さらに冷や汗を掻く一同。

その時、権太郎、好男、長流は燃え上がっていた。

「こんな事をしてる場合じゃないわっ！あたし達も素敵なイブを過
ごさないとっ！」

「そうねっ！」

「クリスマスに素敵な思い出をっ！」

長流はそう言って足早に去っていった。

「さあクリデ、手伝ってもらいましょうか？」

「あなたなら、出来るわよね？」

クリデに詰め寄る好男と権太郎。

「な、何が？」

「それは・・・」

「いいなあ、聖夜にめくるめく不倫。」

「尼子っ！意味が違うぞっ！」

「そうよっ！」

「ぺいりんっ！」

長流は「たこ焼き屋 竜王」に突入して言った。

イキボトケンジャーのアジトを出た後すぐ友人に珍平がどこにいるのか聞き出したのである。

「ちよ、長流さん・・・」

珍平は冷や汗を掻きつつ顔に縦線を入れ、青ざめながら言った。

奥から声が聞こえたような気がしたが、長流は気にしなかった。

「さああたしと素敵な聖夜を過ごしましょう」

長流は珍平に近寄って言った。

「や、やだ〜。」

近寄る長流に恐れをなす珍平。

「待てーい!!」

声が聞こえ、男が疾風のように現れた。

男は長流のライバルの恋蜜爆萌れんみつぱくほうで、スーツを着ており、ネクタイはしておらず、ワイシャツのボタンは上の方だけ開いている。

「あつ、あんたはっ!」「萌えおやじ委員会」の恋蜜爆萌っ!」

「珍平さんと素敵な一夜を過ごすのはこのボクだ!」

店内にズカズカと入って言う爆萌。

「いいえ、あたしよ!」

「ボクだ!」

「あたしよ!」

「ボクだ！」

「あたしよ！」

「こ、恐いよ。」

珍平はそう言い、サングラスの下から涙を流した。

「いやあ仕事が予定より早く終わってよかった。」

朝林清雄はシャンパンを飲んでそう言った。

ここは清雄の家。

清雄は妻の夏美と相方の吉野菊太と共に食事をとっている。

部屋にはクリスマスソングが流れ、クリスマスツリーが置かれ、クリスマス飾りがされており、テーブルの上のサラダもローストチキンもパイで包まれたスープもとっても美味しそうである。

「そつやな。今日は清雄と素敵なクリスマスが過ごせてるしな。」

菊太はにこにこしながら言った。

「そのセリフ、菊太が言ったらものすごくエロく聞こえるで。」

「菊太くん、ここに妻であるあたしがいるわよ。」

「失礼しました。」

その時呼び鈴が鳴った。

「はい。」

玄関に行く夏美。

やがてサンタの格好をした男と共に大きな箱をひとつずつ運んで戻ってきた。

「な、何やそれ。」

「さあ。」

ゴトゴトと動く2つの箱。

驚く清雄達。

やがてフタが開き、ひとつからは好男が、もうひとつからは権太郎が出てきた。

「よ、好男さんに権太郎さんっ?!」

清雄達は突然の2人の登場にとてつもなく驚いた。

「な、何してるんですか?」

冷や汗を掻きながら訊く清雄。

「何って清雄さんと素敵なクリスマスを過ごしに来たのよ。」

「そうよ。さあ清雄ちゃん、あたしと素敵な聖夜を過ごしましょう。」

2人は箱から出ながら言った。

「いや、あの、だから、ボクは結婚してて・・・」

「2人とも何言ってるんですかっ?!」

菊太は慌てて弁解する清雄の前に行き、言った。

「菊太・・・」

「俺の事を思って、追いついてくれるんな。」

「清雄と素敵な夜を過ごすのはこのボクですよっ!」

清雄はがく然とし、「ちょっとでも期待した俺がアホやっただけだ。」
と思った。

「あんた達っ！清雄はあたしのダンナよっ!」

夏美が燃え上がりながら言った。

「ほほほほ、夏美ちゃん。あなたと清雄ちゃんが結婚しても、あたしの清雄ちゃんへの思いは変わらないわ。」

夏美に詰め寄って言う権太郎。

「そつよ夏美さん。結婚ぐらいであたしの清雄たんへの思いが変わると思つたら大間違いよっ」

同じく夏美に詰め寄つて言う好男。

「2人とも甘いな、俺は清雄を学生時代から知ってんねんぞ。」

菊太は3人の傍らでキザっぽく言った。

「な、何ですつて?!」

燃え上がる権太郎と好男。

「さあ清雄、ボクと素敵なクリスマススを過ごしそう。」

清雄に詰め寄つて言う菊太。

「だからボクは夏美ちゃんと結婚してるんやつて!!」

「清雄ちゃん、今からでも遅くないわ。あたし達まだ30代よっ！さああたしと一緒に素敵なクリスマススを過ごし、新たな歴史を築きましょっつ!」

同じく清雄に詰め寄つて言う権太郎。

冷や汗を掻く清雄。

「何言つてるの権太郎さんっ！清雄たんと素敵なクリスマススを過ごすのはこのあ・た・し さあ清雄たん、あたしと一緒に愛のラブラブ夢のときめきシャンパンで乾杯ローストチキンもケーキも美味し

そう雪が降る降るサンタさんに欲しい物は何かなあホワイトメリー
クリスマスを過ごしましょっ」

同じく清雄に詰め寄って言う好男。

冷や汗を掻く清雄。

「だからっ、清雄はあたしのダンナだって言ってるでしょっ！」

「た、助けて〜！」

「日本って・・・」

引き攣った顔に縦線が入るクリデ。

「さあどんどん行くわよっ！中山ヒロコのクリスマススペシャルネ
タツ！」

廣子は張り切って言った。

「廣子さん・・・もうやめてください。」

「そうです。」

冷や汗を掻いて言うイキボトケンジャー。

「何言ってるの?! 聖夜は長いわよっ！」

「そっよっ」

「おっ、京子さんノリがいいわねえ。」

「さあぺいりん、2人で愛をはぐくむわよっ」

珍平の耳元で言う長流。

青ざめる珍平。

「珍平くん、こんな女装変態おやじじゃなくてボクと愛をはぐくもうね。」

「誰が女装変態おやじよっ?! あんたあたしと同年代でしょうがっ?!」

「うるせえっ! お前と一緒にすんなっ?!」

「お前ら早く出て行けっ! 閉店できねえよっ!」

竜王義理男は2人に怒鳴った。

「さあ清雄ちゃん、あたしと楽しく愉快的な聖夜を過ごすのよっ!」

「清雄たん、クリスマスと一緒に過ごしたいのはもちろんこのあたしよねえ?」

「清雄、オカマなんか嫌やんなあ。ボクと一緒に楽しく夜を過ごそうや。」

清雄に詰めよりまくって言う権太郎、好男、菊太。

脂汗を掻く清雄。

「いや、あの、それは……」

「あんた達っ！いい加減にしなさいっ！」

起こって怒鳴る夏美。

しかし3人は全く聞いていない。

「さあ清雄ちゃん、誰と一緒に聖夜を過ごしたいか言いなさい。」

「そつよ清雄たん。早く言うの。」

「清雄、言っちゃおうや。」

「た、助けて〜！」

「もう日本なんかいやあ〜っ！」

そつ言っつて泣き出すクリデ。

「きーっ！何がクルシミマスよっ！タツオツ、飲むわよっ！」

レイカは魔界でビールを飲みながらそう言い、タツオのジョッキにビールを注いだ。

レイカ&タツオのクルシミマスぶっ潰し大作戦！

「そうだ、飲むぞっ！」

そう言ってジョッキのビールをぐびぐび飲むタツオ。

「何があったんだ？」

「さあ。」

2人の仲間のサブリトンとウィルトネスは冷や汗を掻きながら言った。

完

(後書き)

あとがき

みなさんこんにちは、先日駅のホームで遠足に行くのであろう見知らぬ子供たちの前で電車を待っていたら、通りすがりのおじいさんが私を子供たちの関係者だと勘違いし、「兄ちゃん、頑張つてや!」というセリフを言ってくれました、ぶにねこです。

クリスマススペシャル小説第2弾!

今回も予想以上に長くなりました(^ | ^ ;)

ちなみにクリデは2年前に今は無き「魔法の女王様 パニッシュ・トスディサ」という小説に出ていました。

が、その時は名前は無く、ただの「オカマサンタ」でした。

トナカイの泣き声はインターネットで調べました。

表現しにくい泣き声ですが、あえて表現するなら「ウ、ウォー!」
つていう感じなんだそうです。

ちなみに泣く時と泣かない時があるそうです。

後半はなんかBL色(と、いうかおやじだからボーイズラブじゃなくてオヤジズラブか)強い内容になってしまいました(^ | ^ ;)

ちなみに私、ボーイズラブ小説は高校の時数冊読みましたが1冊し

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3118c/>

レイカ&タツオのクルシミマスぶっ潰し大作戦！

2009年3月24日09時55分発行